

いざみ通信

～養泉寺寺報 Vol.12～



得度式終了後、本山視聴覚ホールにて(2023年10月6日)

2023年10月6日。京都の本山、真宗本廟(東本願寺)において、坊守と長女が得度式を受式しました。得度とは、法名を受け真宗大谷派の僧侶となることで、養泉寺に2名の僧侶が誕生いたしました。本当に有り難いことで慶ばしいことです。二人はこの日まで一生

懸命に準備をし、お勤め練習を重ね、考査を経て当日を迎えました。そしてそれぞれ、釋尼智泉、釋尼咲雪という法名とともに、新たな歩みを始めています。どうか御門徒の皆さんからお寺へ足を運んでいただき、この二人に温かい言葉をかけていただければ幸いです。



緊張しながら御影堂内へ!

ばと思います。いつでもお気軽に住職までご相談下さい。

1人の僧侶が生まれるということ、1人の御門徒が法名をいただくということ、そこには必ず背景があります。悩んだりもがいたり、自分の人生これでいいんだろうかと問題意識を持って、そして初めて一步を踏み出すのです。これはこの日一緒に得度式を受けた全国の皆さんも一緒です。尊いことです。

しかし現代は背景を感じられない時代。私はそう思っています。見える部分だけ、取り入れたい部分だけ。それに合わなければ否定し、省いていく傾向には、怖さを感じます。

どうか今一度、物質的な豊かさだけではない人間本来の心の豊かさを取り戻していきませんか。そんな人間になっていきませんか。

今年もお寺はたくさんの“きっかけ”を作り出していこうと思います。ぜひとも生かして下さい。

ともあれ今回の得度式、本当に嬉しい事でありました。妻と娘に感謝。南無阿弥陀仏。

(文章：住職)

さて、得度式では度牒(どちょう)伝達が行われます。度牒とは、真宗大谷派僧侶であることの証書で、とても大切なものです。そこに明記されるのが法名です。

事あるごとに皆さんにお伝えしていますが、法名とは仏弟子として歩みます、仏教を拠り所として生きていきますという出発点をいただく名前です。中には、法名をいただくことを終活の一環の様にお考えの方もおられる様ですが、意味合いが全く違います。法名をいただくことは、仏教徒として生きていくという方向が定まることです。とても尊いことでこの上なく慶ばしい事なのです。

法名がないまま亡くなった場合は、葬儀の際に住職が法名をお付けいたします。しかし本来は、生きている今法名をいただき歩いていくのが真宗門徒の生き方です。昨年12月に1名、法名をいただくことを希望される方があり、一緒に帰敬式(法名をいただき、仏さまの教えを拠り所として生きる者となる儀式)を行いました。どうか皆さんも法名をいただき、仏教徒としての歩みを始めていただけれ



空き時間を利用して清水寺散策♪



京都在住の老僧の弟も駆けつけてくれました

言の葉～KOTONOHA～

毎月の法語印は解説付きで喜ばれています。
言葉の味わいが深まりますよ！！



毎月変わる言葉。皆さんに届けたい言葉ばかりです！

養泉寺の掲示板の言葉（9月から2月まで）

- 9月 「僕らは色とりどりの命と
この場所で共に生きている」
- 10月 「物をうくるには心を以てし
法をうくるには身を以てす」
- 11月 「地球って国があつたらいいのに」
- 12月 「ともかくもあなた任せのとしの暮」
- 1月 「はじめに尊敬あり」
- 2月 「まことの道は 明日ではおそすぎる」



教えて！！ Q & A コーナー

御門徒さんからいただいた疑問や質問にお答えします。今回は子供からの素朴な疑問から！



Q 仏さまの場所は どうして金色なのですか？

A 仏さまが御安置されている空間をお内陣といいます。本堂のお内陣、また各家庭のお内仏は金箔が貼られ、キラキラと輝いています。これは、豪華さを強調するためでも威厳を示すためでもありません。

お内陣はお浄土の世界を表しています。法事でも勤められる『仏説阿弥陀経』の中では、お浄土の世界は金色に輝く素晴らしい世界であることが説かれます。それになぞらえ、お内陣は金色なのです。

そして金色は輝きます。それは何を表すかといえば、私たちの存在の輝きです。それは、能力的に優れているから素晴らしい、ということではなく、一人一人のありのままが尊い存在であるということ、金色の輝きをもって教えてくれているのです。

お寺の裏側 —URATERA—

もっと知ってほしいお寺の情報や、知っているようで知らない仏事の豆知識などを紹介します！

あなたの知らない打敷の世界

法要になると御本尊前や各尊前を打敷(うちしき)と呼ばれる布で逆三角形になる様に荘厳します(前ページ下の写真参照)。皆さんのお宅のお内仏にもあると思いますが、これは法要や季節ごとに飾るのが習わしです。ずっと飾ったままでほこりを被っていませんか？ 逆に引き出しの中にあるのに使わないままになっていませんか？ 養泉寺本堂も法要や季節ごとに打敷を出したり片付けたりを繰り返しています。それにより法要やご命日を大切にする姿勢が身についてきます。これが非常に大切なことです。皆さんもぜひ心掛けて下さい。養泉寺にはたくさんの打敷がありますが、ここでは近年使っている打敷を少し紹介したいと思います！！

①



②



③



どれもきれいなね～！



⑤



⑥



④



⑦



- ①春彼岸(寄進人:松井清七) ②盆参・新盆(寄進人:鷺澤宰一) ③年始(本堂新築記念) ④秋彼岸(寄進人記載なし) ⑤報恩講(寄進人:倉井平八<中尊前>、倉井平六<祖師前>、佐野新宅<上卓>)昭和52年御遠忌の際に寄進されたもの ⑥時期に関わらず使用(裏記載なし) ⑦時期に関わらず使用(裏記載なし、かなり古いもの)

御門徒さんの寄進によるものがほとんど。行事の時にはぜひとも注目じゃ！



Photo Gallery

9月1日 養泉寺夏のこども会

本堂で大型紙芝居を楽しんだ後、境内と墓地を利用して、肝試しを行いました！
終了後は、お化け役やスタッフ皆でカレーライスを食べました。



9月23日 秋彼岸会・永代経法要



大町の橋本さんから、本山に行ったときに拾ってきた種から育てたというモミジの苗をいただきました。またご厚意で、お参りの方々に差し上げました。



9月27日 慶誓寺さま来られる

新潟市北区の慶誓寺様ご一行が、お寺の旅行で養泉寺に立ち寄られました！
ありがとうございました！



10月28日 養泉寺第二十世住職継承法要・報恩講

100名を超える御門徒の皆さんからご出席をいただき、賑々しく勤める事が出来ました。また多くの方からお祝いをいただきありがとうございました。この法要をスタートとし、より一層、念仏相続に努めてまいります！！



10月14日、11月11日
養泉寺おそうじ隊



お疲れさまでした！

11日には初めて参加された女性の方もおられました！
男女問わず、誰でも気軽に参加して、お手次寺をきれいにしよう！

10月22日 仏具お磨き



ピカピカ～！



12月31日 除夜の鐘



子どもたちも最後まで、
手伝ってくれました！

1月28日 初御講



法話 (令和5年 報恩講)

【講師】 小林 智光 師
(小千谷市浄照寺)



しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。「信心」と言うは、すなわち本願力回向の信心なり。

おはようございます。皆さん生きてますか？死んでる方はいないと思います。なぜこんなことを言うかと申しますと、お寺はお葬式の時にお世話になる、死んでからお世話になるというイメージがあるかも知れませんが、生きている間に仏法を聞かせていただく。これが真宗門徒の生活であり生き方であります。

改めまして、ただいまご紹介をいただきました小千谷市片貝町にある浄照寺の小林と申します。

本日は、養泉寺様の住職披露の法要ということで、改めましておめでとうございます。そして御門徒の皆様におかれましてもおめでとうございます。

最初にお読みしたのは、親鸞聖人の『教行信証』という書物の中の一節でございました。難しい言葉がたくさん出てきたんですが、簡単に説明させていただきます。お経の中で、「聞く」ということはどういうことか、という、我々が仏様の願いの生起本末、生起というのは発生する、本末というのは、仏様がなぜ仏様になったのか、その発生した理由、謂れと、それがどうなるんだと、それを聞くことが「聞く」ということだということです。これで完全に理解した方はいらっしゃいますか。分かるわけないですよ。もっと簡単に言ったら、「聞く」ということはどういうことかといったら、そのまま聞くことですよ、ということです。それが本日のテーマ、「聞く」ということです。

聞くことを、聴聞といいます。この「聴聞」という言葉は二つの漢字から成り立っておりまして、上の「聴」という字は視聴覚室の「聴」、下の「聞」という字は門がまえに耳です。「聴」という字には、しっかり聴くとか集中して聴くという意味があります。一方下の「聞」という字。これは、勝手に耳に入って来るということに使います。今、雨の音が強くなってきましたが、聞こえてきますよね。私たちは別に意識して聴こうと思ってません。でも聞こえてきます。これが「聞く」ということです。つまり、意識して聴くということと無意識に聞こえてくるということの組み合わせが「聴聞」ということなのです。

仏教の教えを聞くには、まずしっかりと集中して聴くということが大事なんです。よく冗談交じりで、楽な姿勢で聴いて下さい、昼寝して聴いていてもいいですよ、仏法は毛穴から沁み込みますからね、と言うことがありますが、本当に寝られると困ります。とにかく聴く時はしっかりと集中して聴くということ。そうしていくと、自ずと聞こえてくる場合があります。聴いた言葉が聞こえてくるということです。身近な例で言いますと、私の子どもが出かける時にうちの母親が必ず「車気を付けてね、自転車を付けてね」と言うんです。その時に、「俺もばあちゃんに同じこと言われてたな」と。これが聞こえてくるということです。

そして、そのまま聞くということ。例えば私よく言われるんです。「小林さんってお仕事何してるの？」って。「お寺の住職です」と言うと、「えー見えない」と。何でかという「髪の毛があるから」と。住職というとね、坊主で作務衣を着て竹箒で境内を掃いている、あれが住職なんですよね。私には髪の毛があります。普段は普通の洋服を着ています。普通の車に乗って、妻がいて子どもがいます。普通の生活というか、住職に見えないわけですよ。だから、「髪の毛剃らなくていいの？」とか「滝に打たれていいの？」とか、よく言われます。浄土真宗は滝に打たれるとか、座禅するとか断食するとか、そういうことはしなくていいんです。なぜかという、聞くということが一番の修行だからです。これを「聞即信」といいます。「聞くということがそのまま信心でありますよ」ということです。普通は「信心があるから聞く」と思うんです。こういった法話などのお誘いをすると、「いや、私は頭がパーらし、信心なんてない人間だから、ちょっとまだ早いです」と言う方が多いです。普通は信心深い方が聞くと思うのです。ところが浄土真宗は逆なんです。聞くということが信心なんです。これ難しいように聞こえるかも知れませんが、疑いを挟まずにそのまま聞くということなのです。それがとても大事になってくるんです。

先ほど「仏願」と言いましたけど、仏様の願いを聞くということが大事なんです。仏教を開いた方はお釈迦様、釈尊です。なぜ仏法を開かれたのか。お釈迦さまは人間として生まれました。人間として生まれ、生き、年を取り死んでいかれた。お釈迦様は人間として生まれたから、お釈迦様の声を私も聞くんです。ではお釈迦様がなぜ人間に生まれたのか。それは、人間に生まれないと人間を救うことができないからです。少し難しい言葉で言うと、「衆生を憐れむがゆえにこの人間に生まれたい」という言葉です。お釈迦様は何も人間に生まれなくても良かったんです。もっと素晴らしい神や仏になって素晴らしい所で永遠に留まっても良かった。しかしわざわざ苦勞の多い人間として生まれ生きて、年を取って死なれたんです。人間を救うためには人間に生まれて、人間の苦勞を知って、人間の言葉で説かないと救われない。だから人間としてお生まれになったのです。

私たちにもありませんか。その立場になって初めて分かるという経験。住職になって初めて、住職になるってこういうことなんだと分かりました。それまでは、父親を横で見て、分かっていると思っていたんです。ところが、分かっているということ、いざその立場になるということとはまるで世界が違う。皆さんにおかれまして一番身につまされるものは、年を取るということでしょう。うちの御門徒さんでこんなことを言っている方がいました。膝と腰で医者に通っているんですが、すごくどくんですよ。「先生、私どうしてこんなに膝だの腰だの痛くなって、今度は白内障で眼の手術、何でこうなるんですか」と。そうしたらお医者さんがはっきり言ったそうです。「それは仕方ないです。年を取れば必ずそうなるんです」と。これ、年を取ってから分かるでしょう。そして人が死ぬ、家族と別れるということはこういうことなんだ、ということも別れて初めて分かるでしょう。だからお釈迦様は、人間を救うためには人間に生まれないと分からないから人間にお生まれになったのです。

そうは言いますが、聞くといったってなかなか難しいですよ。いろいろとお声がけをしても、「いやいや」と言われる方が圧倒的に多いです。なぜ聞かれないのか、つまり聴聞ということがなぜ進まず、浄土真宗のお寺が繁

盛しないのか。それは私たちが生老病死に困っていないからです。生老病死を仏教では「四苦」といいます。仏教というのは根本的に、この四つの苦しみを解決することが一番の目的です。ところが今、四苦が四苦でなくなりつつあるんです。もっというと、ぼんやりしてきているんです。

例えば年を取るということですが、今寿命が長くなりましたね。そしていろいろな介護施設があります。朝の九時前後になると、大きい車が来るでしょう。デイケアセンター〇〇とか、よく聞きますよね。昔はそういうところに入ったら「姥捨て山だ」と言われて、もう終わりだと思ったそうですが、今はそんなことないですよ。施設の方も愛想がいい対応も良くなっているように思います。だから老いるということが、苦しくないとは言いませんが昔とはイメージが変わってきたかも知れません。

それから病気。昔は、癌は不治の病と言われてましたね。ところがどうでしょう。癌になっても早く見つけて手術で治る方がいらっやいますね。癌で亡くなる方は当然いますけど、不治の病ではなくなりつつありますよね。

それから「死」ということ。今、お葬式をご自宅でしなくなりました。セレモニーホール、葬儀屋さんで圧倒的に行いますね。そうすると、死というものが見えなくなりました。昔は亡くなったら、湯かんしてやって綿に水を含ませて、なんてことをしたでしょう。今もセレモニーでしますが、自宅でしないので見えにくくなりましたよね。

だからこの「生老病死」という四つが、昔よりもぼんやり見えにくくなっているんですよ。無くなったわけではないですが、何となくうすらと分かってたまざまざとしたものはないですよ。あくまで私のイメージなんですけどね。だから、生老病死の解決と言われても、あまりピンとこないのではないですか。

ところが、「生」。ここだけは解決できないんです。なぜ解決できないかといったら、人間関係ですよ。親子の問題、夫婦の問題、兄弟の問題、いろんな問題…。これはいつの時代でも必ずあります。だから生きることは大変な苦しみである。これは絶対にあります。はっきりしています。だからここだけは絶対に私たちは解決したいんですよ。

私よくラジオを聞くんですが、テレホン人生相談って皆さんご存知ですか。大体平日のお昼にやっています。あれを聞いていますと、そのほとんど、もう九割と言っていいでしょう。家族の問題です。昨日あった相談は、旦那のことで相談があります。と。何かといったら、旦那が家族のことに興味がないんです、という相談でした。あの人は仕事ばかりで、子どもが二人いるんだけど、子どものことを何も気に掛けない。私は何で子育てをしてきたんだろう。あの人は何も興味がない。子どもが病気をしても、何か分かった様な分からん様なふりをしている。子どもが何か悪さをした時は、一緒になって注意はしてくれるけど、何か今一つ、ぼんやりとしていて、ちゃんと関わってない気がする。これは一体どういうことですかね、という相談なんです。これに対する回答は、「昔と今では家族のイメージが違うから、分からないんでしょう。昔は厳父慈母と言いまして、つまり、父ちゃんは厳しくおっかなくて、母ちゃんは優しいということが求められていた。ところが今の世の中になって、家事を協力しろ、分担しろと言われても、どうしていいか分からないんでしょう」というものです。これは、女性でもあるんですよ。子育てをしていて、子どもとどう接していいか分からない。どう愛情を注いだらいいのかわからないという相談もよくあるんです。つまり、人生相談のほとんどは家族の相談なんです。

じゃあ、いろんな苦しみというものがありますが、何で聞くということが難しいのか。今言いました様に、四苦がぼんやりとしているということ。それからもう一つ大事なことがあって、これが聴聞することを妨げているんです。煩惱です。皆さんは煩惱ありそうですね。煩惱とは、「煩わす」と「悩ます」と書きます。

煩わせるとはどういうことかといったら、いつも目の前にちらつくんですよ。この煩惱ということに関して、『観経疏(かんぎょうしよ)』という書物の中にこういう言葉が出て来ます。五欲といいまして、五つの欲がある、と。「在家」というのは、五欲を貪求すること相續してこれ常なり。たとい清心を発せども、なおし水に画くがごとし。」という文章に出て来るんです。在家というの、出家していないこと。出家というの、髪を剃り山に入り、家族を捨てお金を捨て名誉を捨てたお坊さん、これを出家僧といえますね。これに対して、「家」に「在」るんです。家にいるまんま生活をしている。私どもも在家です。髪も剃ってません、山にも籠ってません、家族もいます、財産も…そんなにないですけど、銀行の口座ぐらいは持っています。在家には五欲、つまり五つの煩惱があるんだと。この煩惱が常に巡り巡って邪魔をしているんだと。だから、「たとい清心を発せども、なおし水に画くがごとし」なのです。

清心という言葉が出てきました。清心というの、優しくしてあげようとか良いことをしようという、清らかな心ですよ。では、五欲って何なのかといったら、食欲、睡眠欲、財欲、色欲、名誉欲、この五つをいいます。

食欲。説明する必要ないですね。美味しいもの食べたいなあ、酒が飲みたいなあというのも食欲の一つです。睡眠欲。疲れたなあ、眠たいなあ、ゴロゴロしたいなあ。財欲はお金です。お金が欲しいんです、私たち。色欲。色の欲。つまり異性に対して、よく思われたい、モテたいということです。こういうお話をすると、「いやいや、色欲なんてどうの昔に捨てたこって」と言われるかも知れません。ところが、年を重ねても色欲というものは絶対に消えないです。やっぱりモテたら悪い気しないですよ。

うちの御門徒さんで、もう亡くなった男性の方なんです。頑なに施設には行かないと言っていたおじいちゃんがいらっやいました。絶対行かない、俺は家にいる、と。ところが、面談をしてもらったケアマネさんがすごい美人だったらいいです。その瞬間に、「まあ一回行ってもいいか」となりまして、そしてショートステイに迎えに来た施設の方。この人も愛想の良い可愛い女性だったそうです。そうしたら毎回喜んで行くようになったそうです。これ色欲以外の何物でもないですね。だから私たちにはこの五欲というものは常にあるんです。分かりやすいですよ。

この中で、食欲、睡眠欲、財欲、色欲、これは何とか抑えることができるんですが、一番抑えにくいのが名誉欲なんです。これを仏教では「名聞」ともいうんです。つまり良い評判が聞こえたい。あの、年の割に若そうに見えるね、とか。これを名聞というんですよ。名誉欲も同じことです。人によく思われたい。逆に言うと、人にばかにされたくない。これ思い当たる節ありませんか。家族の間でもそうですよ。洗い物をして家事をしても、旦那さんが帰って来て、うまいのの字も言わずにバクバク食べて、ころっと寝られたら腹立ちますよね。何のために作ってるんだ、ありがたいあの字もないのか、と。ご飯を作ってあげたのに、味をみる前に醤油かけられたら腹立つでしょう。そして当たり前のように「まあまあだったなあ」なんて言われたら腹立ちますよね。当たり前のように思われたらやっぱり腹が立ちますし、これ男性でもそうですよ。一生懸命に働

いて帰って来たのに、当たり前のように「ゴミ出しとい
て」なんて言われると腹立ちますよね。お前俺を何だと思っ
てるんだ、と。これ、ばかにされたくないということです。これ
が名誉欲、名聞。もっと今風の言葉で言ったら「プライド」
ですよ。自尊心ともいいます。これが傷つけられると、
私たちはとっっても嫌なんです。ところが、これがなかなか
消えにくい。だから、いろんな煩惱があるから、私たちは
清心を発せども水に画くがごとし。水に画くというのは、
あつという間に消えちゃうということです。砂に書いたと言
った方が分かりやすいですかね。砂に書いても、水が来
たら消えますよね。私たちの良い心なんてのは、煩惱とい
う波によってあつという間に消えてしまう。これが『観経疏』
の中で善導大師が言われていることなんです。

私の地元は片貝町、花火の町なんです。今年は九
月の土日開催で、ものすごい人が来ました。でも町に駐
車場がないんです。だから空いている土地を駐車場にし
てるお宅がある。うちも空いている土地を駐車場として少
しお貸してるんです。その駐車場に以前は予約を受け
付けていたんです。ところが今は受け付けてないんです。
なぜかという、予約して来ない人がいるんです。そうす
るとトラブルになる。だから受け付けてないんです。

今年、神奈川の方から電話がかかって来て、母が取
って、「神奈川の〇〇と申しますが、車を止めさせてもら
えないでしょうか。母が脚が悪くて車椅子に乗って、停
められないと大変なので何とか止めさせてもらえないで
しょうか。」と言われたんです。そうしたらうちの母が、「申
し訳ないですね、トラブルになることがあるので、一応来
ていただいてからお受けしてるんです。」と言ったんです。そ
うしたらまた二日後に電話がかかってきました。「一昨日
電話した〇〇と申しますが、やっぱり母が脚が悪くて、何
とかお願いできませんでしょうか。」と言われたので、母
がしぶしぶ予約を受けたそうです。そして、「予約済」と書
くとトラブルになるので、「関係者駐車場」という紙を置
いて空けておいたんです。母は、「何回も電話かけてくる
から、予約受けたわよ。」と言うから、「そりゃ仕方ないね。」
という話をしました。

さて、当日になりました。時間になりました。来ないん
です。でも待っていたら、車が一台入って来ました。その車
を見ると、車椅子マークがありました。「ああ、神奈川の〇
〇さん、来た来た。」と言って案内すると、その方が御丁
寧に、「今回は無理を言ってすみませんでした。これほん
のつまらないものですが。」と言って小さいお菓子を出さ
れました。「そんな別にいいのに。」とやり取りをして、車を
停めてもらいました、そしたら助手席から女の人が出て
きました。年恰好からすると恐らく奥さんでした。そして後ろ
のスライドドアが開くと、白髪の女性が出てきました。「あ
の方が脚の悪いお母さんかなあ。」と思いながら見て
いたんです。そして降りてきたら、その方が普通に歩いて
いたんです。「あれ、普通に歩いてるぞ。」と思って見て
いたら、確かに後ろの荷台に車椅子は置いてありました。脚
が悪いということも恐らく本当だと思うんです。でも、普通
に歩いてるんですね。それを見た瞬間に、私やっぱりイ
ラッとしちゃったんです。「脚が悪いって何回も電話して
きて、それなのに普通に元気そうじゃん。」と思いました。うち
にお参りに来るおじいちゃんやおばあちゃんの方がよっ
ぽ脚悪いじゃん、とうちの母と話していたんです。親切
にしてやったのに、その姿を見て元気そうじゃんと思う。水
に画くように忘れてしまうんです。住職なのに、お坊さん
なのと思われるかも知れませんが、人間というのはこう
いう生き物なんです。私たちが人間には煩惱が渦巻いて

ますから、どれだけよい心がけを発したところで、消え
てしまうのですよ、ということです。

曹洞宗の言葉に、親切にした時というのは、親切にさ
れた方じゃなくて、親切にした方が感謝を下さい、とい
う言葉があるんです。普通は、親切にしてもらったら感謝
を下さい、ですよ。でもこれはなぜかと言えば、親切にし
ようという気持ちになったのは誰のお陰ですか、相手
のお陰でしょう、だから親切にした方が感謝を下さい、
というお話なんです。相手によってそういう心が発させて
もらってるんですよ、ということです。

私、小学校に通う子どもがいます。小さい頃は寝て
る姿を見て、かわいいな、こいつのために俺も頑張らな
きゃな、と思ったんです。ところが今憎たらしいですね。
お小遣いを月に500円渡しているんです。この前なんて私
の前に来て、トントンと机叩くんですよ。そして「忘れて
るならいい」と言うんです。そうしたら妻が「ほらあなた、
お小遣いお小遣い」と言うんです。それで気付いたん
ですが、腹立ちますよね。でもその子どもがいること
によって、親心が芽生えてくるんですよ。親切な心とい
うものも、目の前に人がいるから親切にしようとい
う心が発るんです。

普通に道を歩いていて「人に親切にしたいなあ」とい
う人はいません。昼寝していて「誰かに優しくしたい
なあ」なんて思う人はいません。相手がいるから心
が発るわけでしょう。これも一つの他力ということ
なんです。様々なご縁や人によって心が発させて
もらうということは、他力ということなんです。よく、
他力本願、人任せではだめだ、ということ
を言う人がいるんですが、そうじゃないんです。
自分で心は発せない。自分で発した心なんてのは
消えちゃうもんです。そうじゃなくて、人によ
って発させてもらうものなんです。

辛いことや腹が立つこと、たくさんあります。でも
生きていく中で自分が何か思ったり感じたりした
時に、自分で発しているんじゃないんだな、人
に発させてもらってるんだな、というふう
に思うことができたなら、人生は少
くとも豊かになるんじゃないで
しょうか。俺は親切に生きて、私
は一生懸命生きてきた。こうい
う心で人生が豊かになるとい
うことはありません。そうじゃ
なくて、もしかしたら自分は
こう思っていたけれども、あ
の人のお陰かも知れないな。
今こうしてお寺に行って
仏法を聞いているけれども、
私一人じゃあり得なかつた
な。亡くなった旦那さん、
奥さん、子どもさん、親、
兄弟、こういった方が、
皆さんの手を引いてくれた
んじゃないですかね。これに
気付くか気付かないかとい
うことで、生き方が変わ
ってくるのではないですか
ね。まさにその人によって、
相手によって、ご縁によ
って発させてもらったとい
うことを、疑いなくそのま
ま「そうだな」と思えるとい
うこと、そのまんま聞くと
いうことが、最初に申し
ましたけれども、聴聞とい
うことなんです。そして、
聞くということがそのまま
信心である。信心深いから
聞くんじゃないんです。
聞くから信心が備わって
いく。いただいていくとい
うことですよ。よくよく心
に留めておきたいと思っ
ていることとさせていただきます。
そのことをお話しまして、
本日のお話とさせていただきます。

最後、皆さんと共に
お念仏を申して終わら
せていただきたいと思
います。南無阿彌陀仏…

(2023年10月28日録音。テープ起こし、要約:住職)

あなたにインタビュー ～河合勝子さん～

今回は、いつも楽しくお話して下さる、寺泊吉にお住まいの河合さんにお話を伺いました。



倉：ご主人を亡くされてから3年が経ちますね。
 河：家で3年ほど介護してましたので、正直大変でした。ですので急に亡くなったわけじゃなく、亡くなった時点では寂しさはあまり感じませんでした。
 倉：なるほど。
 河：でも亡くなる前大分弱ってきていた時、職人気質の主人から、「お前でもよかった」と一言言われました。63年ぐらいいっしょに生活してきたけれどそんなことは初めてで、その言葉が今の自分の励みになっていますね。
 倉：亡くなった時よりも今の方が寂しさはありますか？
 河：そうですね。亡くなって3年目に入るぐらいになってから気持ちも生活も変わりましたね。それまでは、寂しいというより“変な感じ”でした。

倉：連れ合いを亡くされてから、年々寂しさを感じている方は大勢いらっしゃると思います。河合さんの経験がそういった皆さんの励みにもなると思います。
 河：そうですね。
 倉：どうしてもイメージだと時間が経つにつれ寂しさも薄れていくのでは、と思いがちですが、そういうわけでもないようです。
 河：やっと振り返られる時期になってきたんです。だから今、寂しいのは寂しいです。だから毎日お内仏の前に座って一日の報告をしてみたりしています。
 倉：今はどんな日々を送られていますか？
 河：性格もあるのですが、私は人様の所に踏み込んでいくということをしてきませんでした。以前住んでいた都会では近所付き合いが全くなく、こちらへ帰ってきてからも人との関わり方を知りませんでした。でも誘ってもらえれば行けるしそれが今は楽しいです。その中で友達付き合いが得意な方を見ると「私も今のままじゃだめだな」と思っていますが、なかなか入り込んでいなくて（笑）
 倉：人それぞれ性格もタイプも違いますからいいんじゃないでしょうか。ぜひお寺にも顔を出して下さいね！
 河：そうですね！ありがとうございます！（2024年1月23日 インタビュー）

伝筆で、いろいろな言葉を書いてみませんか？



ヨガ教室開催中！楽しくやっています☆

毎月第2・4月曜日
 13:15～、1時間程度
 詳しくは大矢ひとみ先生まで！
 Tel 090-2980-6293
 Web <http://sonomamanohito.blogspot.jp>

10月3日。
 タレントのおばたのお兄さんがテレビ撮影のため養泉寺へ！坊守による伝筆を体験して下さいました。素晴らしい作品になりました。



LINE 友だち追加

一般社団法人伝筆協会
認定講師



こちらからいろいろとやり取りもできますので、どうぞお気軽に連絡下さい！（坊守）

全ての連絡先、問合せ、疑問や質問、ご意見ご感想はこちらまで！！

電話 0258-75-2210
 ファックス 0258-75-2210
 ホームページ <https://yosenji-teradomari.jimdofree.com/>
 メール yosenji1594@gmail.com
 郵便 〒940-2502 新潟県長岡市寺泊一里塚 3883

LINE 友だち追加



養泉寺 LINE

LINE 友だち追加



養泉寺 kids LINE



TERADOMARIYOSENJI
 養泉寺 Instagram

養泉寺 行事カレンダー（3月～6月）

春彼岸会 永代経法要 第十八世住職一周忌	3月20日（水・祝）
	<時間> 午前10時半～正午過ぎまで <法話> 自坊説教 <備考> 法要詳細は別紙参照下さい。
定例法話会	5月28日（火）
	<時間> 午後1時半～午後3時まで <会費> 不要 <備考> 茶話会あり（お時間のある方）
法中講	6月16日（日）
	<時間> 午前10時～正午 <志目安> 千円 <備考> お齋を用意いたします。

十二月廿二日 生田利男 （見附） 南無阿弥陀仏 （敬称略）	十月廿七日 幸村雅英 （間瀬）	十月十五日 小林一二三 （蛇塚）	十月九日 野瀬美代江 （磯町）	十月三日 杉田佐和子 （熊森）	八月廿三日 成田久英 （横曽根）	八月十九日 池田三津男 （上荒町）	七月十八日 能登博 （白岩）	五月十二日 新津谷壽美子 （坂井町）	四月廿七日 杉田長二 （上荒町）	四月八日 佐藤萬蔵 （新潟市）	二月五日 渡辺セイ （新潟市）	一月廿五日 和田トシ （長辰）	一月十日 倉井英世 （養泉寺）	還浄された方々 （令和五年）
---	-----------------------	------------------------	-----------------------	-----------------------	------------------------	-------------------------	----------------------	--------------------------	------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-------------------

寺族の声―編集後記―

元旦の夕方、この日最後の
お年始のお客さんを見送ろ
うとしていたその時、大きな
揺れに襲われた。誰がこの地
震を予想出来ただろうか。
「人生いつ何が起るのか分
からない」というが、頭でし
か分かっていたいなかったこと
を思い知らされた。

能登は浄土真宗寺院や御
門徒が多い「真宗大国」であ
る。私の友人や知り合いも多
いが、本堂も庫裏も全壊、寺
の中はめっちゃめちゃという
声を聞き、心が痛い。

学生時代、サークルの夏合
宿の一環で七尾市を訪れた
ことがある。清々しい日差し
と真っ青な海が私たちを迎
え入れてくれた。広場でサツ
カーを楽しみ、仲間とバーベ
キューで盛り上がった。

七尾市も今回被害が大き
かったと聞く。あの場所は、
施設は、出会った人々はどう
しているだろう。日々新聞を
読みながら自分にも出来る
ことはないかと焦る。募金を
募るお寺も出てきた。でも私
たちが出来る最も大切なこ
とは、心を寄せ、そして忘れ
ないことではないだろうか。

家族親族十名を地震で一
度に亡くし、一名だけ生き残
ったと報道された寺本直之
さんの言葉が思い浮かぶ。
「この命絶対に無駄にしま
ない」。私たち一人一人が、胸
に、心に、刻まなければなら
ない言葉だと思う。（住職）

<発行> 養泉寺出版 2024年2月29日